「近代建築ステンドグラス制作者木内真太郎の業績 －木内真太郎の関連資料を中心として－」に対する討論 その1 (金田美世, 清水隆宏, 河田克博著 日本建築学会計画系論文集, 第78巻, 第686号, 915-924, 2013年4月号掲載)

DISCUSSION ON RESEARCH ACTIVITY PUBLISHED AS
“THE ACHIEVEMENT OF SHINTARO KIUCHI AS A STAINED GLASS DESIGNER AND
A PRODUCER – With examinations of files and data about Shintaro Kiuchi –” 1
(Miyo KANEDA, Takahiro SHIMIZU and Katsuhiko KAWATA,
J. Archit. Plann., AIJ, Vol. 78, No. 686, 915-924, Apr., 2013)

松波 秀子*

Hideko MATSUNAMI

Discussed items are as follows.

1. Relationship between Shintaro Kiuchi and famous architects. : How did he collaborate on the production stained glass works with them?
2. It has a problem in chronological order to conclude that Shintaro Kiuchi made the stained glass for St. John's Church designed by J. McD. Gardiner.
3. Relationship between J. McD. Gardiner and Kenji Araki in the Gardiner Architect Office.

Keywords : *Shintaro Kiuchi, Stained Glass, Unosawa Stained Glass Works, J. McD. Gardiner, Kenji Araki, St. John's Church in Kyoto*

木内真太郎, ステンドグラス, 宇野澤組ステインド硝子製作所, J. McD. ガーディナー, 荒木賢治, 京都聖ヨハネ教会堂

1. はじめに

貴論文を拝読させていただきました処、いくつか疑問が浮かんでまいりました。本稿(その1)では、ガーディナーを含む建築家との仕事について、討論という形で質問させていただきたいと存じます。

2. 建築家とのまとまった仕事について

貴論文 P917, 左段下から 13 行目「木内真太郎の建築家とのまとまった仕事」、同 11 行目「木内真太郎が比較的多く仕事をしている建築家別に」、のまとまった仕事、比較的多くの仕事とはどのような意味か、何を基準に多いのか、ご回答下さい。又、木内が、単に依頼されて建築家の作品におけるステンドグラスを制作したのではなく、建築家と共同してステンドグラスをつくり上げたと解釈できますが、木内が建築家とどのように仕事を進めたのか明らかにしなければ、この様な表現はできないと考えます。制作の各工程において、木内が各建築家本人と具体的にどのように仕事をしたのか、ご回答下さい。

2-1-1. コンドルとの仕事について

貴論文 P917 左段下から 7 行目「別組織された政府訓練生の引率でコンドルも乗船しておりこの出会いはその後の仕事に繋がっていった」とありますが、船中から滞独中、貸費生の世話をした河合浩蔵は、コンドルの渡欧目的は欧州視察と英国への帰省で、正式な任務は特になく、政府訓練生だけでなく渡独一行の監督、世話役というところだった。山本ら三等客の待遇改善を妻木頼黄が掛け合うも叶わず、一等船客のコンドルが交渉したと述懐しており『建築雑誌』406号, 566号), 当時の両人の格差(戦前は、官庁、民間とも、高等官と職員の食堂や便所を別にする等、厳しい格差を伝える回顧談は多くある)をふまえた上で、その後の仕事に繋がる程の出会いがあったと云うに足る根拠資料をお示し下さい。当時、宇野澤以外に本格的な制作技術を持つ者はいな

かったので、出会い云々と関係なく、宇野澤製作所が制作するのは当然のことと考えます。又、これは木内でなく宇野澤とコンドルの関係です。関連して、貴稿「辰野金吾作品における木内真太郎のステンドグラス」に、第一銀行京都支店の現場で木内が「現場員として辰野と直に接していたことが明らか」とありますが、現代でも、組織幹部が現場を訪れる際、現場幹部は部下が作成した資料等を以て説明し幹部の指示を仰ぎ、それを部下に(陪席していたとしても)改めて下達し作業を進めるのが一般的な流れで、部下は日誌に「幹部が現場に来場…、作成資料を提示…、幹部の指示により…」と記すのが普通で、幹部が直に現場の助手に指示することはまずありません。現代より遙かに格差の大きかった明治期に監視側の末席(棟札による)の木内が辰野と直に接していたとは考え難いと思います。

2-1-2. ガーディナーとの仕事について

1) 聖ヨハネ教会堂(日本聖公会京都聖約翰教会堂, 表1: 聖ヨハネ教会)

同教会堂のステンドグラスの制作を木内の業績として表1に挙げていますが、疑問に思います。同教会の聖別式は明治40年5月16日ですから、4月には建物がほぼ竣工し聖別式の準備をしたと思われます。ステンドグラスは、正面と交差廊の大窓3ヶ所、屋根窓6ヶ所あり、搬送、設置の手間を考慮すると、遅くとも4月中旬には完成していたと考えられます。一方、木内は同年3月26日に大阪の住友を退職し、最短で3月末に東京の宇野澤製作所に移ったとして、完成間近い時期に、旧知とはいえ、新入りの木内が、制作にどのように関わり得たのか、諸情報を時系列に検証して、ご回答下さい。

貴論文 P917 右段下から 23 行目「木内自身が同教会との関わりを家族に伝えていたこと、設計がガーディナーと荒木賢治であること」を木内の関与の根拠とし、注 17) で設計がガーディナーと荒木である根拠を、貴梗概「J.M. ガーディナー作品における木内真太郎のステ

* 特定非営利活動法人歴史建築保存再生研究所
理事・博士(工学)

Director, NPO Research Institute of Cultural Heritage, Dr. Eng.

ンドグラス」に依るとし、貴梗概では、拙稿「ガーディナー建築事務所のスタッフ、荒木賢治と上林敬吉について」に依っていますが、拙稿では、同時期の京都村井邸の棟札に荒木の名があることから、彼が（所員として）設計に関与した可能性を指摘したにすぎません。設計時、荒木は工手学校卒業後8年の26歳、ガーディナーはハーバード大文学士の49歳で、彼らは対等なパートナーではなく労使、師弟の関係であったと容易に判断できます。貴梗概では、木内家資料の大正3年頃の姓名帳に荒木の住所が記され、歳暮を贈る丸印が付され、同4年1月に荒木に引越祝を出していること、拙稿の記述「荒木は所員である期間にも自分の作品を発表する等比較的自由に仕事をし、十数年で退所、独立している」から、「ガーディナーと荒木賢治は師弟というよりは、パートナーの関係にあったのではないか、関西に居を構えた荒木と荒木の事務所は、いわばガーディナーの関西方面の仕事の拠点となったであろうことが推測される」とありますが、拙稿では、大正初期の『建築世界』に、荒木単独名で作品が掲載されている事を指摘しており、文脈から荒木が所員となった頃(明治36年以降)から自由に他の仕事をしたとは考えられません(拙稿をご確認下さい)。拙稿から飛躍して、明治39年当時に荒木はガーディナーのパートナーであったと推測し、表1に設計者として併記するに足る根拠資料を以て、ご回答下さい。又、木内と荒木の親交を示す貴稿の根拠は、木内家資料の大正3,4年の姓名帳ですが、その10年程前に同教会堂の設計に荒木が関与したことが何故木内が同教会のステンドグラスを制作したことの根拠になるのか、ご説明下さい。更に、姓名帳の記載から、荒木の事務所(又は住居)が、ガーディナー事務所の関西方面の拠点となったと飛躍推論する根拠、関西における大正初期のガーディナー事務所の実作、計画案の存在を1件でもお示し下さい。

尚、家族の伝聞は、昭和9年に室戸台風で大窓が大破した際の修理のことかも知れません。

前出拙稿で荒木の独立を大正中頃と推定しましたが、貴稿に示された大正3年頃の姓名帳の「ガデーナ・荒木建築事務所」「荒木様」の記載から、荒木が大正初期に独立し大阪に移ったと仮定すると、この頃から、荒木が自作を単独名で発表したこと、木内が引越し祝を贈ったこと、歳暮をガーディナーでなく荒木に贈ることと符合します。ガデーナ・荒木建築事務所とあるのは、主任技師として築いた実績と人脈、ガーディナーのネームバリューを考慮した事務所名か、ガーディナー事務所にいた荒木という木内の覚書か、原文を拝見していないので判然としませんが、住所に西区以下が記されていないので、荒木は独立を企てるも、結局事務所を構えなかった可能性が高いと考えます。尚、荒木は、大正10年には藤田合名会社技師と久原礦業会社嘱託を兼務しており、藤田財閥、久原財閥の営繕部門の技師として経営幹部の邸宅営繕(久原邸等)にも関与していた可能性があります。大正10年の住所は東京(淀橋町柏木)で、翌11年に荒木建築工務所(赤坂区氷川町)を設立しています。(『建築学会会員名簿』)。

2) 村井吉兵衛京都別邸 (表1:村井吉兵衛邸、当初より長楽館の別称有)

同邸に現存する旧東浴室、旧和室の3作品は、『建築工藝叢誌』の記述から宇野澤製作所が制作したことは明らかですが、同邸は明治38年着工、42年竣工で、新人の木内がガーディナーとどのように仕事をしたのか、宇野澤、別府との役割分担をふまえ、ご回答下さい。

木内家資料に、明治34,35年に設計者でない木内が描いた日本生命大阪本社図面が多数あるように(貴前稿)、デザイン画が存在して

も、制作主導は宇野澤、別府である可能性を排除できません。又、『建築寫眞聚覧』の裏面に、木内による建物名称の記載(必ずしも正確ではない)があっても、それを木内が制作したと記したのは木内自身ではないので、慎重な検証を要します。『建築工藝叢誌』の明治45年の宇野澤製作所に関する記事等を考え合わせると、明治40年代初期の作品については、宇野澤製作所の制作を無条件に木内の業績とするのは疑問で、十分な精査を要すると思います。

尚、本項で触れた『建築寫眞聚覧ステンドグラス』(図1~50,初版:T6)には、図版番号が連続する続編『建築寫眞聚覧ステンドグラス 巻二』(図51~100,T15)、『同 巻三』(図101~150,S3)があり、特に巻三の扉には「本集は、我國ステンドグラスの先祖たる別府、宇野澤兩工場の作品及参考圖案を主として収め…」とあり、宇野澤製作所の作品を多く収録し木内家資料の精査に参照すべき基本文献ですが、なぜ参照されないのか、ご回答下さい。

3) 旧内田定槌邸 (施工者:吉田正蔵)

貴論文でP918左段下から2行目「荒木賢治の関与により建設」とありますが、前項と同様、荒木の関与は必ずしも木内制作の根拠にならないと考えますが、ご回答下さい。

P918右段上から2行目に、(内田邸の扉のステンドグラスの)デザインが、村井邸のものと共通するとありますが、丸い花、三つ葉は内外の図案にもよく見られます。村井邸のものは、デザイン作風、硝子、ケームが同邸に現存する他の当初の作品と些か異なり、当初ではないようにも見えます。両者のデザインが、内外の図書を参考としたのか、ガーディナー(ならば、共通して当然)、木内、宇野澤製作所、別の美術家、後世の別者の何れによるものか不明なのに、何故デザインの共通性が木内制作の傍証となるのか、ご回答下さい。

4) 日光真光教会(定礎:大正3年、竣工:大正5年)

制作年を大正3年としていますが、窓は勿論、建物の姿が見えない定礎の年にどのように制作し得たのか、ご回答下さい。上林敬吉旧蔵資料等に依り設計主任は上林で、荒木の関与を示す資料はありません。荒木はこの前に札幌の小田邸の設計監理に従事し、同地で教会や郵便局等を設計する等、この頃独立したことの傍証となります。又、荒木が関与しなくても木内が制作したことが分かります。

P924注17)にある前出貴梗概に「(木内家資料に)現寸ハ当時ノ露国大使館ノ蔵書ニ作ル」とあり、露国公使館の蔵書の図版に倣ったことが分かります。この少し前に、ガーディナーは同公使館舞蹈室を設計しており、木内でなくガーディナーが蔵書(キリスト教美術書の類)を閲覧又は借用したと思われます。前出貴梗概に「黙示録に記される4つの生き物(人間、獅子、雄牛、鷲)を現すとされる中段各パネル」とありますが、4つの生き物を現すのではなく、正に4つの生き物が描かれ、それらが四福音書記者を表すことは、キリスト教美術のイコノグラフィーの基礎事項です。上段、下段の図柄は十二使徒のうち9使徒と2聖人を象徴しています。木内に、夫々の意味と持物(attribute)、その図案化についての知識はなく、ガーディナーが蔵書から採用する図版を選んで模すよう指示し、上林が手配したと推察されます。このように木内は多くの施主や建築家から、様々に学び、知識を深め、技量を磨いたと思われます。但し、建築家と仕事をしたのではなく、建築家の作品のごく一部の仕事をしたと考えます。

以上、「(木内の)ガーディナー(本人)との仕事」というに足る具体的根拠を以て、ご説明下さい。

(2014年4月10日原稿受理、2014年6月26日採用決定)